



Title	袖の中の魂：『とりかへばや』垣間見場面に見られる『古今集』九九二番歌引用について
Author(s)	片山, ふゆき
Citation	国語国文研究, 149, 14-28
Issue Date	2016-10-19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89773
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_149_14-28.pdf



[Instructions for use](#)

袖の中の魂

——『とりかへばや』垣間見場面に見られる『古今集』九九二番歌引用について——

片 山 ふゆき

一、問題の所在

また魂ひとつはこの人の袖のうちに入りぬる心地して、見過ぎてたち帰るべき心地もせず、現し心もなくなりにければ、さは今宵入りなと思ふに、
(卷一 二〇五—二〇六頁)^①

右は、現存『とりかへばや』卷一において、宰相中将が四の君の姿をついに垣間見る場面。恋い焦がれてきた四の君の姿を初めて目にした彼は、たちまち彼女の美しさに心を奪われ、理性を失っていく。その恋情を表す傍線部の表現は、『古今和歌集』の著名な次の歌を引用したものである。

あかざりし袖のなかにやいりにけむわがたましひのなき心ちする
(卷十八・雑下・九九一・陸奥)

魂が身を離れ、相手の袖の中に入りこんで留まっているように感じられる、として満ち足りない思いを訴えるこの歌は、夙に『源氏

物語』に引用されている。そこでは、柏木、夕霧、匂宮の魂が、それぞれ恋しい女君の袖の中に入るといふ恋の文脈に据えられて、女君に対する執着の心を描出する。そして、こうした恋の文脈における当該歌の引用は、『浜松中納言物語』にも受け継がれていた。

となれば、『とりかへばや』の傍線部の表現もまた、『源氏』から『浜松』へと継承された、恋の文脈上の、前掲歌引用を引き継いだものと結論づけることもできそうなものである。ところが、その文脈には飛躍が認められる。当の『古今集』歌の「魂」は、「物がたり」をした相手のもとに残してきた「魂」であり、また、それを引用した先行物語の表現もやはり、身が離れた後に女君のもとに残ったままの「魂」である。対して、『とりかへばや』の右の傍線部は、あくまで四の君を垣間見た瞬間の心境であり、「魂」は残してくるのではなく、身より先に入ってしまった。なおかつ、宰相中将は、その魂に誘われるかのようにして、四の君のもとに忍び込むのだ。

さらに、『とりかへばや』の『古今集』九九二番歌引用は、巻四に

おいてもう一例認められる。

やをらたち出でたまふも、まれまれ残りたりつる魂は、ありつる御袖のうちに入りぬる心地したまふ。(巻四 四八八頁)

権中納言となつた宰相中将が今大将の邸で吉野の姫君達を垣間見、その魅力にひかれながらも人目を気にしてその場を後にする。右の傍線部は、後ろ髪を引かれつつ立ち去る宰相中将の心情を描出したものであつて、先の四の君の場面のものに類似した表現となつている。同じ人物の、垣間見場面における心中を描くという点でも先の例と共通するこの傍線部は、ただ同表現を流用したものにも見えよう。しかし、この心境はあくまで去り際のものであり、四の君の時のように「魂」がそのまま「身」を誘うことはない。その点、先の四の君垣間見場面の例と表現上は類似、対応するものの、その文脈には一応の差異が見受けられるのだ。

以上、『とりかへばや』に見られる『古今集』九九二番歌引用の表現には、先行例からの飛躍、および同作品内における反復とズレが認められる。このような表現登場の背景には、基となつた九九二番歌の物語ならびに和歌作品における受容史との深い関わりがある。本稿では、『古今集』九九二番歌引用表現「袖の中」の「魂」に注目し、同表現受容の時代的変遷と、『とりかへばや』の文脈との関連性を精査、分析し、そこから同物語における「袖の中」の「魂」の位相を明らかにしていきたい。

二、『古今集』九九二番歌の受容

女ともだちと物がたりしてわかれてのちにつかはしける
みちのく

あかざりし袖のなかにやいりにけむわがたましひのなき心ちす
る (巻十八・雑下・九九二)

『古今集』九九二番歌は、右の詞書に見る通り元來恋の歌ではない。『法華経』五百弟子受記品の衣珠説話を踏まえつつ、「魂」を玉に見立て、それが女友達の袖の中に入ってしまったという。恋しさのあまり魂が遊離するという発想は、当該歌に限つたものではないが、その行き先を相手の袖の中に求めるのである。なお、『小馬命婦集』では、九九二番歌を引用したと思われることばと歌が、『古今集』の詞書と同様に女同士戯れとして交わされている。ここからも、同歌はただちに恋ばかりに結びつくものとは享受されていなかったことが理解されよう。⁽³⁾

そして、この友人間に交わされた歌が、男女の恋を表わすものとして、後代に受け継がれていく過程には、『源氏物語』による同歌引用が、大きな影響を与えている。

起きてゆく空も知られぬあけぐれにいづくの露のかかる袖
なり

と、引き出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰め
たまひて、

あけぐれの空にうき身は消えななむ夢なりけりと見てもや

むべく

とばかりはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞き
さすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心
地す。〔若菜下〕④二二八—二二九頁

たましひをつれなき袖にとどめおきてわが心からまどはるるか
な〔夕霧〕④四一—四五頁

出でたまひなむとするにも、袖の中にぞとどめたまひつらむか
し。〔浮舟〕⑥二三五頁

以上が『源氏物語』における九九二番歌引用箇所である。〔若菜下〕
の例は、女三の宮のもとを去る柏木の心境を表現したものである。ここには「袖の中」の語は明示されてはいないが、高田祐彦氏は、その直前の柏木の歌「起きてゆく」における「露のかかる袖」が、『古今集』「離別」の四〇〇番「あかずして」の歌の「袖の白玉」を経由し、「袖に残る魂」を導き出し⁸、たとして、この箇所を「離別の悲哀とそれゆえの執着」が両歌の連関から結合した表現と見る。念願の一夜を過ぎた柏木の魂は、別れを惜しむ心と執着心により、女三の宮の袖に残されるのである。続く「夕霧」の例は、夕霧が落葉の宮に贈った歌。身近に迫り、あれこれとことばを尽くして、夜を通じて口説いたものの落葉の宮の頑なな拒否に遇った夕霧は、魂を彼女の袖の中に残してきたと、その恋情を訴える。そして、最後の「浮舟」の例は、浮舟と契りを交わし二夜を過ぎた句宮の、別れ際の心を推し量って語り手が述べたもの。九九二番歌を引き、魂だけは浮舟の「袖の中」にお残しになったことであろうという傍線部の表現は、浮舟と離れ、京に戻らねばならぬ句宮の、名残を惜しむ思いが集約さ

れたものとなっている。

このような『源氏物語』の用例は、次の『竹取物語』における、かぐや姫への未練を表わした、

帝、かぐや姫をとどめて帰りたまはむことを、あかず口惜しく
思しけれど、魂をとどめたる心地してなむ、帰らせたまひける。
〔六二頁〕

という表現の延長にあるといえるが、九九二番歌を恋の文脈に据え、同歌を男女の恋に結びつけることで、自らの「魂」を恋しい女君の周辺どころか、より身体的に密着した印象を与える、「袖の中」に残してしまうほどの激しい男君の感乱と執心とを描出している。柏木、夕霧、句宮という男君達は、ついに接近を果たし、あるいは肉体的関係を結んだ女君に対して、ますます思い乱れ、執着の思いを強くする。九九二番歌を引用した「袖の中」の魂とは、そうした彼らの、女君をも追いつめる愛執の念の表象ともいえよう。⁹

そして、『源氏』に見られた恋の文脈上における『古今集』九九二番歌の引用は、後代に受け継がれていく。『浜松中納言物語』では、式部卿の宮が、吉野の姫君のもとを発つ場面が次のように描かれる。

袖のうちにとどめ置いて出でさせ給ひても、すこしかかどころあり、あはれを知りげなりつるけしき、ありさまの、身にしみておぼし出でらるるに、ほかのことは忘れ果てて、「なきにはえこそ」とぞおぼえける。
〔巻五 四三六頁〕

式部卿の宮によって誘拐され、取り籠められた吉野の姫君は、衝撃のあまり茫然自失となり生死の境をさまよう。途方に暮れた式部卿の宮は、姫君を中納言のもとへと返し、自らが通うようになるので

ある。そうした後、次第に姫君も式部卿の宮に馴れ、彼に返歌をする。傍線部の表現は、そんな姫君に対してますます愛着の念を強くする式部卿の宮の心中を表している。式部卿の宮の激情は匂宮に通じており、傍線部は『源氏物語』『浮舟』の例を継承したものと考えられよう。⁽¹⁰⁾

さらに、時代も下った『有明の別れ』や『我身にたどる姫君』においては、『古今集』九九二番歌が次のように取り入れられている。

袖の中にわがたましいやまどふらんかへりていける心ちこそせ
ね

たましみのいりにし袖によそへても中く物ぞいとまかなしき

(『有明の別』巻二 三八〇頁)

『有明』は左大臣が中務卿の宮北の方に贈った後朝の歌。『我身』は中納言が対の姫君に贈った歌であるが、傍線部は既に逢瀬を重ねた女三の宮のことを指す。要するに、両例ともに、既に関係を持った女君の「袖の中」に、自身の「魂」を残すほどの激しい執着と恋情とを表明しているのだ。こうした文脈における「袖の中」の「魂」という表現は、男女の関係にあることを示すものとして機能しているといえるだろう。「袖の中」に「魂」が入り込むほどの接近、すなわち肉体的な関係を成立させた女との離れがたき、未練の表象。『浜松』『有明』『我身』における「袖の中」の「魂」の語は、そのように位置づけることができる。

以上のように、元は友人間のものであった『古今集』九九二番歌を引用した「袖の中」の「魂」との表現は、『源氏物語』を經由することで、濃密な時を過ごした恋人に対する、男の執着心を表すもの

として受容され、後代の物語作品にも継承された。となれば、一見、『とりかへばや』の先の例も、そうした流れの中に出現したと考えることもできよう。だが、一方で前述の通り、『源氏』『浜松』の例とも異なる要素を、その用いられた文脈において確認できるのだ。では、その相違は、どのような効果を呼び、いかなるものを描出するのだろうか。

三、『とりかへばや』における「袖の中」の「魂」

現存『とりかへばや』において『古今集』九九二番歌の引用が見られるのは、先に述べた通り、次の二場面である。

(A) 端近く簾を巻き上げて弾き出でたる音を聞くよりも、月影に、いと身もなく衣がちにて、あえかにうつくしうなまめきたるさま、尚侍ときこゆとも限りあればこれにはいかさまさりたまはんとする、すぐれたる名は高けれどいかくは思はざりしを、まことにいみじうもありけるかな、と思ふに、また魂ひとつはこの人の袖のうちに入りぬる心地して、見過ぎてたち帰るべき心地もせず、現し心もなくなりにければ、さは今宵入りなんと思ふに、

(巻一 二〇五―二〇六頁)

(B) いつとなくかくてあらんも、気色見つくる人もあらばいとわづらはしかるべければ、やをらたち出でたまふも、まれまれ残りたりつる魂は、ありつる御袖のうちに入りぬる心地したまふ。

(巻四 四八八頁)

両例ともに、「袖の中(うち)」と「入」という歌のことは採用

し、明確に引歌表現であることを提示している。(A)は四の君垣間見場面。宰相中将は、恋い焦がれた四の君の姿を目の当たりにし、身より先に「魂」が彼女の「袖のうち」に「入」る感覚を覚えたという。傍線部の表現は、男君の、恋しい女君への恋情と執着心の強さを描出する点で、『源氏』からの恋の文脈における『古今集』九九二番歌引用の流れを汲んでいるようではある。しかし、ここの「魂」は、後朝に残されるのではなく、自身より先に女君に接近するものとして描かれている。先行例とは文脈上隔たりを持つといえよう。一方(B)は、吉野の姫君達を垣間見てのもの。傍線部は、先の(A)の場面对応するかのような表現になっており、やはり垣間見た相手の袖の中に「魂」が「入」る心地がするという。だが一方で、同表現が出現するくだりは、姉妹の姫君を垣間見た後、人目を気にしてその場を去る際の心境を語っているのであって、四の君の場面のようには身をそのまま誘導することはない。その点(A)に比べ、先行例に通じる部分がある。(A)(B)両場面は、極めて類似した関係にある一方、差異もまた認められるのだ。

宰相中将という人物を理解する上で、『古今集』九九二番歌が、垣間見場面において二度引用されていることは看過しがたい。『源氏物語』をはじめとした先行例は、恋人とのしばしの別れを惜しむあまり、彼女の「袖の中」に「魂」を残してしまうという、男君の未練と執着を描出する表現として、同歌を引用していた。それに対して、四の君および吉野の姉妹の姫君は、宰相中将にとって初めて姿を目にした女性であつて、引用場面以前には「身」の接近すら果たしていない。にもかかわらず、「魂」が身を離れ、先に「袖の中」に「入

るとするのは、先行例に比してみれば、あまりに時期尚早といえる。ここで、『とりかへばや』における『古今集』九九二番歌引用の問題を考えるにあたり、見過ごせない場面を確認したい。

(C) わが君、よし見たまへ」とぞうつくしうのたまふに、あやにくならんもわりなくて、魂の限りとどめ置きて、殻の限りながら出でぬ。
(巻二 二六八頁)

これは、同じく宰相中将が、尚侍(男君)のもとに忍び込み、二日にわたって口説いたものの、結局宥めずかされやむなく退散する際の心境を語ったものである。波線部の表現に関して、『校注とりかへばや物語』『中世王朝物語全集』『新編日本古典文学全集』¹⁾は、波線部の表現も九九二番歌を引いたものとして解釈している。恋しい人のもとに「魂」を留め置くという発想は、なるほど確かに、前の(A)(B)二例に通じ、なおかつ、当該表現が、接近に成功し、間近で散々言い寄った尚侍のもとを去る際の心情を表わしたものである点に着目すれば、かえって、この(C)が、(A)(B)よりも先行例の文脈に近いということも出来よう。だが、(A)(B)二例が、「袖のうち」に「入」という『古今集』の表現を積極的に採用しているのに対して、(C)は「魂」のありかを「袖の中」に限定せず、いとしい人のそばに「とどめ置」くだけ表し、その上で新たに「殻の限りながら」という表現を付け加えていることには、留意すべきである。「袖のうち」に「入」る、と明示した二例と、「袖の中」、「入」るの語を用いない(C)とは、引用態度に明らかな違いがあり、(C)の表現と、『古今集』九九二番歌との間には距離が認められるのだ。九九二番歌を経由せずとも、恋しい人のもとに「魂」を残すという

発想が恋人との別れの場において見られることは、前掲の『竹取物語』の例からも明らかである。むしろ、(C)はこの『竹取』の例に近い。

とすれば、『とりかへばや』において、『古今集』九九二番歌引用の「袖のうち」に「入」という表現は、先行例と、その使用状況が相違する(A)(B)の場面にのみ限って登場し、最も先行例と文脈上近似する(C)では回避されていることになる。では、この差別化は何を意味するのか。

「袖のうち」に「魂」が「入」と表わされる(A)(B)の共通点としては、先述のように、それが垣間見場面であることがまず挙げられるが、それ以外にも、相手が実際の女性であり、宰相中将は必ず彼女達とその後に関係を交わしている、という点も見過(B)ごすことができない。(A)では、「魂」が「袖のうち」に入ってしまうことで「現し心」をなくし、焦がれ惑乱する思いにまかせてそのまま押し入り、四の君と関係を結んでしまう。また、(B)も、その日は退去するものの、後日今大将に導かれ、吉野の中君と契ることになる。それに対して、(C)における相手は女装の男性である。『とりかへばや』に同性愛は描かれず、後にもこの二人が結ばれることはない。もちろん宰相中将はその真実を知る由もないが、しかし、ここに「袖のうち」に「魂」が入ったと表現されず、いっす避けられているのは、二人が結ばれない関係にあることを示唆していると考えられまいか。ここには、意識的な使い分けがある。つまり、『とりかへばや』において、『古今集』九九二番歌引用の表現は、心身ともに男女の場面に限定され、宰相中将が女と契りを結ぶ未来を暗示す

るものとなっているのだ。

(A)(B)における「魂」は、魅かれる心のままに身を離れ、先に意中の女君の袖の中に入り込み、かえって、身を彼女のもとへと誘導して契りを結ばせる。すなわち、この「魂」は、密なる接近の後の未練の表象ではなく、密なる接近を希求する心の現われと位置づけることが出来る。

右のような用法には、先行例のものからの文脈上の飛躍が認められよう。『とりかへばや』における「袖の中」の「魂」の位置づけは、『源氏物語』などのそれから変質している。これは、著名な引歌表現の用法を変質、変容させて独自の世界を描出するという、『とりかへばや』の先行作品撰取の方法を考える時、看過できない問題となる。では、このような、先行例とは距離を持った『古今集』歌引用のあり方は、『とりかへばや』独自のものなのだろうか。それとも、『源氏』を経て「袖の中」の「魂」が愛執を表す表現として認識されたといったように、現存『とりかへばや』の時代には、九九二番歌受容の様相自体が、前代のものから変化、変容し、その一端を示しているのが『とりかへばや』における用法なのであろうか。次節では、その下限を一二〇〇年と目される、現存『とりかへばや』の成立時期と前後する時代の和歌作品における、『古今集』九九二番歌受容に焦点を当て、そこから『とりかへばや』の(A)(B)に見られた用法の位相を探っていく。

四、同時代における「袖の中」の「魂」

先述の通り、『古今集』九九二番歌は、特に『源氏物語』に用いられて以降、物語作品において恋の文脈に据えられ、男君の、密なる時を過ごした恋人に対する未練と執着心を描出するものとして、受け継がれていった。『とりかへばや』と成立の時代も近いとされる物語では、『有明の別れ』において後朝の歌に取り入れられている。これは、『源氏』、『浜松』などの流れを汲むものとして解すことができる。

それでは、和歌作品においてはどうかだろうか。『古今集』九九二番歌に基づく「袖」、「魂」(心)の語を用いた歌を挙げていくと、次のように、やはり恋の歌が目立つ。

- ①しらせばやこすにはつるる袖のうちに入りぬるたまのぬしは誰ぞと
(月詣和歌集・「見衣恋を」・三七六・高松宮)
- ②夕ぐれのが玉しひはおもひやる袖の中にあやまりなやむらん
(家隆卿百番自歌合・恋百首・六十七番左)
- ③みし人の袖にうきにしが玉のやがてむなしきみとや成りなん
(後京極殿御自歌合・「恋の歌あまたよみ侍りける中に」・六十三番左／秋篠月清集・恋十五首・五六三／拾玉集・百番歌合・六十四番左持)
- ④時のまの袖の中にもまぎるやとかよふ心に身をたぐへばや
(拾遺愚草・雑恋十首・二八五)
- ⑤あかざりし霞の衣たちこめて袖のなかななる花の面かげ

(千五百番歌合・春三・二百七番右勝・定家／拾遺愚草・春廿首・一〇一四)

⑥とどめおきし袖のなかにや玉くしげ二見のうらは夢もむすばず
(歌合・旅宿恋・八番左・定家／拾遺愚草・「建曆三年九月十三夜内裏歌合、旅宿恋」・二五六六)

⑦たましひの入りにし袖の匂ゆゑさもあらぬ花の色ぞかなしき

(拾遺愚草・二五七六)

⑧うらめしや今日しもかふる衣手に入りにし玉の道まどふらん
(拾遺愚草・「秋の暮をもろともに惜みあかしてさとへいでにける人に、いでぬ人につたへて」・二六一六)

⑨おろかなる涙も見えぬ袖の上をとどめし玉と誰かたのまん

(拾遺愚草・「返し」・二六一八)

「袖」に入る「魂」を詠み込んだこれらの歌は、中には⑤のように春の花を詠んだものもあるが、それ以外は恋心を詠じている。その点、『源氏』を経由した受容のあり方と軌を同じくするものと理解できよう。また、こうして見ると、同時代の受容が、藤原定家詠に偏っている点に気づかされるが、定家は、自ら編んだ秀歌撰『定家八代抄』にも『古今集』九九二番歌を採用しており、詠歌に度々取り入れられている。では、定家の九九二番歌受容はどのようなものであろうか。

千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

あはれなりうたたねにのみみし夢のながき思ひにむすばほれなん
題不知 読人不知 (一一三三)

枕よりあとより恋のせめくれればせんかたなみぞ床なかにをる

陸奥

(二二三三)

あかざりし袖の中に入りにけん我が玉しひのなき心ちする

(二二三四)

題不知

読人不知

わりなくもねても覚めても恋しきか心をいづちやらば忘れん

(二二三五)

恋しきにわびて玉しひまどひなばむなしきからの名にや残らん

(二二三六)

『定家八代抄』(恋四)において、『古今集』九九二番「あかざりし」歌は右の通りに配列されている。ここには、『古今集』のそれとは大きな違いが認められる。まず注目されるのは、『古今集』詞書は排され、恋部に恋の歌として収められている点である。そして次に、前後に置かれた歌だが、これらはいずれも激しい恋情を表出したものであることがわかる。「枕より」歌は身を責めさいなむような恋心を表わし、「わりなくも」歌もまた、苦しいほどに激しい恋の情熱を表現する。つまり、当該の引用部は、狂おしいほどの「情熱的な恋心」を表出した歌を配置した箇所にあたるのだ。

渡邊裕美子氏は、『古今集』六八九番歌「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ」について、『古今集』における配列と、『八代抄』の配列を比較して、そこから、「宇治の橋姫」を「悲恋」と結びつける、定家独自の同歌への視点を見出している。その上で渡邊氏は、『八代抄』に見られる独自の視点は、定家の『源氏物語』撰取の試みと連動しており、定家の「橋姫」詠の「新しき

のひとつの源泉となつている」と指摘する。となれば、当該の「あかざりし」歌の配列も同様に、『源氏』撰取を通して、『古今集』のそれとは相違した解釈がなされていることを示していよう。「八代抄」の配列は、定家が「源氏」を受け、その文脈に何より男君達の、苦しいほどに切迫した情熱的な恋心を読み取ることで、「あかざりし」歌を、そうした「情熱的な恋心」を表出する歌として位置づけ直していることを意味するのである。

このような「情熱的な恋心」としての「あかざりし」歌の位置づけは、詠歌からも確認できる。

建久七年内大臣殿にて、文字をかみにおきて廿首よみ侍り

しに、恋五首、かたおもひ

神なびのみむろの山の山風のつてにもとはぬ人ぞ恋しき

(二五七五)

たましひの入りにし袖の匂ゆゑさもあらぬ花の色ぞかなしき

(二五七六)

おくもみぬ忍ぶの山に道とへば我が涙のみさきにたつかな

(二五七七)

もしはたれすまの浦浪たちならし人のたもとやかくはぬれけん

(二五七八)

ひだたくみうつすみなはを心にて猶とにかくに君をこそ思へ

(二五七九)

前掲の『拾遺愚草』所収の⑦は、右の通り、建久七年(一一九六年)「かたおもひ」の題のもとに詠まれたものである。「たましひ」の歌は、明らかに「あかざりし」歌を踏まえ、『とりかへばや』と同じ

く、「入」るの語を採用して、その恋心を歌っている。注目すべきは、同歌の眼目が、「かたおもひ」の激情、すなわち一方的ながらも情熱的な恋心を描き出すことに置かれていることである。同歌において「袖の中」に「入」る「魂」は、相手を恋する心の切迫性、一途に思う恋心の強さを印象づける上で格好の表現として用いられている。

『古今集』九九二番「あかざりし」歌は、『源氏』撰取を通して、『古今集』に見られた友人間の戯れの文脈から切り離され、より切迫した「情熱的な恋心」を表す歌として解釈されていたのである。前引の同時代の和歌作品も、その流れの中にあるといえよう。そして、こうした歌において「袖の中」の「魂」という表現は、「情熱的な恋心」の喩ともなっている。

そうした中で、後述の二首には、この時代における『古今集』九九二番歌受容の様相と『とりかへばや』の用例とを照らし合わせ、その関連を解き明かしていく上で、注視すべき表現が認められる。まず、前掲②の『家隆卿百番自歌合』の「夕ぐれの」歌。この歌における「袖の中」の「玉しひ」は、恋人との別れの後朝に残してきたものではない。

よもすがらおもひやりつるたましひは君がねざめにみえやしつらん
(一条摂政御集・一三九)

の歌のごとく、恋しさに思いを馳せるあまり、魂が遊離し、身に代わって相手のもとを訪れるものとしてある。『古今集』九九二番歌を本歌とし、「袖の中」の語を用いることで相手への執心を描出しつつ、かつ、そこに魂が「いりなやむらん」、入りかねるのだろうか、恋に逡巡し思い悩む心を表わす。

つづいて、④の「時のまの」歌。『拾遺愚草』に収められるこの歌は、文治三年（一一八七年）「皇后宮大輔百首」の一首で、恋しい人の「袖の中」に少しでも紛れ入ることができるかと、身を離れて相手のもとに通う心に、身自体を連れ添わせたいと、情熱的な恋心を表現する。ただ、この場合、「魂」の語はなく代わりに「心」とある点で、九九二番歌とは一定の距離を持つとも考えられるが、「袖の中」にもまぎる」という発想の基盤には同歌があろう。そして、この「時のまの」歌も、「夕ぐれの」歌と同じように、別離の際相手のもとに残してきた「心」(魂)ではなく、離れた先で相手を思いやって遊離したことを思わせる、恋しさに「かよふ心」を表現する。その上、「心」に「身」を添わせたいという、

思ひやる心にたぐふ身なりせばひとひにちたび君はみてまし
(後撰集・卷十・恋二・六七八・大江千古／深養父集・四七)

右の歌のごとき発想を合わせて取り込み、恋する男の願望を表現するのである。なお、このような「袖の中」に入る(入ろうとする)「心」に「身」を添わせるといふ趣向は、「魂」と「心」との相違はあれ、『とりかへばや』の宰相中將の用例と重ね合わせて見た時、看過できないものともなろう。

ともかくも、「夕ぐれの」歌、「時のまの」歌はともに、恋しさのあまり相手の「袖の中」までに入りこんでしまおうとする「魂」(心)を詠出しており、その点では、相手のもとに「残した」とする『古今集』九九二番歌、およびそれを撰取した「源氏」以下の用例とは、「魂」の位置づけが異なっている。「源氏」などに見られた「袖の中」の「魂」は、相手との接近を果たし、親密な時間を過ごした後の離

れがたき、執着心を描出したが、当該の二首にあたっては、後朝の要素は後退し、身は遠く離れていながらも恋い焦がれ、思い余って「袖の中」に入ってしまうような強い恋慕の情を表わす。切に相手を恋う「情熱的な恋心」は、今は遠く離れた恋人のもとへと「魂」を誘い、「袖の中」にまで入り込ませてしまふのだ。これは、つまり、「情熱的な恋心」の喩として「袖の中」の「魂」という表現を認識するが故の、バリエーションの一つといえよう。

以上のように、『とりかへばや』成立と前後する時代の和歌作品に目を向けると、定家周辺において、『古今集』九九二番歌、および、それを踏まえた「袖の中」の「魂」は、相手を強く思う心の現れ、激しくも苦しい「情熱的な恋心」の表象として用いられていたことがわかる。となれば、『とりかへばや』における先の垣間見場面中の(A)(B)の用例も、この流れの中にあると考えることも出来よう。宰相中将は美しい女性を垣間見ると、たちまちに心惹かれ、そのあまりに燃え上がった恋情故に、彼女達の「袖の中」に我が「魂」が入ってしまったような心持を覚える。これは、「袖の中」の「魂」を「情熱的な恋心」の喩として捉える、定家周辺の解釈とも呼応している。先行作品と文脈上隔たりを持った、宰相中将における用例は、共時的な表現當為の中で生まれたと考えられる。

そして、後代の物語作品にも、右のごとき用法を継承したと思われる用例が一部見受けられる。

たゞこゝもとにて夜もあかしつく見たち給へるに、宰相の君のあしをとすれば、かくてみえじと、いそぎたちのき給へど、只あの袖の内に我たましあはとまりぬる心ちして、有にもあら

ず、ひきかへさるゝやうながら、立出給ふに、

〔「吾の衣」春 三九頁〕

いづくをも入たちわがまゝにおぼしたる御心は、つきづくしき物ゝひまもむなしからぬ事にて、いとよくみ給けり。(略)たゞこの月ごろうはの空にさらでもあくがれつたるたましゐの、やがてこの御袖にとまりぬる心地して、たえがたき物思ひのつきぬるぞあぢきなきや。

〔「恋路ゆかしき大将」巻一 二六六―二六七頁〕

『吾の衣』の例は、中納言が西院の姫君の姿を初めて垣間見る場面『恋路ゆかしき大将』は、端山大将による女一の宮垣間見場面である。要するに、右の傍線部における表現は、二例いづれも垣間見時の心中を表すものとして用いられているのだ。したがって、傍線部の「たましゐ」は、『源氏』やそれを受け継ぐ『浜松』『有明』のごとき、密なる接近を果たした後に、後朝の思いのままに「残された」魂ではなく、『とりかへばや』同様、燃え上がった情熱的な恋心で身を離れて相手の「袖の中」に入ろうとする魂を意味する。さらにいえば、この両作品とも男君は、当該場面を契機として恋心を募らせ、後に二人は結ばれる展開となる。これらは、『とりかへばや』の用法を継承したものののだ。

このようにして見ると、『とりかへばや』の宰相中将における「袖の中」の「魂」の表現は、『古今集』九九二番「あかざりし」歌受容の時代的な変化にもなつて生み出されたものだということがわかる。そして、後代には、その用法も、同歌のバリエーションの一つとして享受されていった。

ただし、ここで改めて注意したいのは、宰相中将の(A)(B)両場面の差異である。前節において確認したように、垣間見場面にあたる(A)(B)は、表現上極めて類似、対応する一方で、文脈には差が認められる。(A)において宰相中将は、四の君の魅力に「魂」が遊離し、そのまま彼女の「袖のうち」に「入」ってしまった心持になる。そうして「魂」を失い、「現し心」をなくした彼は、「袖のうち」の「魂」に誘われるかのようにして忍び込む。他方(B)では、吉野の姫君達の姿に心奪われるものの、外聞を気にして、惹かれつつも押し入ることなくその場を後にしている。

この(A)(B)の差異を、同時代の和歌作品および後代の用例に照らし合わせて吟味してみれば、(A)の文脈が特異なものであることに気づく。まず、後代例である前引『苔の衣』『恋路ゆかしき大将』両例は、いずれも(B)の例に類似する。『苔の衣』の中納言は、その場を立ち去っており、傍線部は去り際の心中として語られる。彼は、その後も恋慕を募らせ、病臥するに及んで両親の知るところになり、その結果めでたく結婚をする。『恋路』の端山大将もまた、そのまま思いにまかせて押し入ることはせず、恋心を募らせつつ月日を経た後に、ようやく機を捉えて忍び込む。『とりかへばや』の用法を継承したかに見えた二例は、どちらも(B)の文脈によるのである。さらに、先の和歌作品に目を移しても、同様のことがいえる。定家周辺に見られた「情熱的な恋心」の喩としての「袖の中」の「魂」は、あくまで一途に思う心の強さの表出に眼目が置かれている。離れた先でもずっと慕い続け、我が「魂」を相手のもとへ通わせる。「かたおもひ」の題からもわかる通り、一途に思い続け、恋慕する心

の表象となつていなのだ。遠く隔てられた「身」と寄り添う「魂」との対比。これは、(B)の文脈および後代例とも抵触しない。身は離れようと、ひたすらに相手を恋い続ける、切実で情熱的な恋情。それが、「袖の中」の「魂」の表現の基盤にはある。

こうした用法に対して、(A)の文脈における「袖の中」の「魂」は、異質な展開を迎える。宰相中将は当該場面において初めて四の君の姿を垣間見、その刹那、相手の「袖の中」に「魂」が入り込んでしまった気持ちになる。同表現は、宰相中将の情熱的な恋情を描出するわけであるが、前述の先行例のみならず、同時代の用例と比較してみても、その文脈には飛躍がある。彼は、ここで生じさせた四の君に対する激しい恋心を、心ひとつに抱え込み、遠く離れた先で一途に思い続けることはしない。「袖の中」に「魂」が入り込む心地を覚えたその次の瞬間には、「魂」の後を身が追うようにして忍び込み、そのまま彼女に寄り臥していく。ここには、遠く隔たった距離も、また、一途に思い続けた時間もない。宰相中将は、庭の垣間見る者と、邸内の見られる者の間にある、わずかな距離に「あかず」と感じ、しかもその隔たりも、一瞬のうちに解消してしまうのである。他例に比してみれば、(A)の用法は、あまりに性急であり、かつ過剰なものであることがわかるだろう。『古今集』九二番歌に託し、男君達が嘆いた、障害としての距離を、宰相中将はすぐさま無効化してしまう。隔たった「身」と寄り添う「魂」との対比の構図は、引用後すぐさま失われてしまうのだ。四の君垣間見場面において、宰相中将は「情熱的な恋心」の表明として「袖の中」の「魂」の表現を用いるものの、同表現が抱え持った、遠く隔てられながら

も一途に思い続けるイメージと、当該場面との間には落差がある。

そして、表現に対するイメージ、つまりは、同時代的な共通理解との落差は、極端に熱しやすく、先走りがちな宰相中将という人物を浮き彫りにする。身は離れたところで一途に思い続ける「情熱的な恋心」の喩、「袖の中」の「魂」は、(A)の文脈においては唐突であり、かつ、そのまま障害なく距離を無効化してしまう宰相中将の行動に照らせば、彼自身の実際の状況とは乖離した過剰な表現となる。そうした過剰な表現の利用は、彼自身の思い込みの強さ、すなわち、実の伴わない、ことばばかりを飾り立てていくような過剰性を顕在化させていく。このような、人口に膾炙した表現を、それに対する共通理解とはズレのある文脈に据え、ことばと実情との落差をあぶり出していく手法は、宰相中将にまつわる引歌表現において顕著に見られる。宰相中将の恋を彩る数々の著名な引歌表現は、その表現が抱え持つ固有のイメージとは落差のある文脈に据えられることよって、現状を認識し得ず、ことばのみ過剰に飾り立てる宰相中将の人物像を前景化させ、彼を相対化していくのである。四の君垣間見場面における、この異質な『古今集』九九二番歌引用も、その一つといえるだろう。

対して、物語も終盤の(B)における宰相中将は、先の(A)とは異なり、恋心を内に秘めつつその場を後にしており、他例に通じる文脈になっている。こうした変化は、取りも直さず、宰相中将という人物の変化に対応しよう。巻三において女君を失った宰相中将は、以降、「昔限なかりし御心も名残なくまめになりて」(巻四四六七頁)、「をさをさうち乱るることもなくてまめだち歩くめるに

や」(巻四 四七五頁)と、かつての好色心は鳴りを潜めてすっきり「まめ」になったと評される。それに連動して、巻四の(B)では、(A)に見られた思い込みの強さも落ち着きを見せ、逸脱することもなくなったというわけであろう。ただし、一方で(B)において吉野の姫君の「袖の中」に入った「魂」は、失踪の女君を思い、心を尽くす中で「まれまれ残りたりつる魂」であるとあえて表現されている点には注目せねばなるまい。この文脈は、女君への激しい愛執の念と、吉野の姫君に対する情熱的な恋心が同時並列的に表されているのである。この用法もまた、一途で情熱的な愛情を表す同表現のイメージとは落差がある。宰相中将は、あくまで実の伴わない人間、すなわち戯画化された色好みとして描かれている。

五、おわり

以上、『とりかへばや』における『古今集』九九二番歌引用表現「袖の中」の「魂」に着目し、その用法を時代的変遷と合わせ、分析、検討してきた。ここから見えてきたものは、九九二番歌受容の時代的变化との連動性、ならびに、そうした同時代的な共通理解とも一線を画した、『とりかへばや』の独自性である。『源氏物語』を経ることで、親密な時を過ごした恋人に対する、男の未練、愛執の念を表す表現として位置づけられていった「袖の中」の「魂」は、やがて定家周辺において一途で情熱的な恋心の喩として認識されるようになる。そして、その認識と、先行物語とは隔たりを持った四の君垣間見場面、吉野の姫君垣間見場面の用法とは密接に絡み合い、連

動している。だが、その一方、四の君垣間見場面における文脈は、「袖の中」の「魂」に対する同時代的な共通理解との間にズレがあり、また、共通理解に沿った形にも思われる吉野の姫君垣間見場面にも、宰相中将を揶揄する表現が並べ記されているのである。

なお、定家周辺の和歌作品や、そこに見られる解釈との密着性や連動性は、作者未詳である『とりかへばや』成立の時代的文化的情景を解き明かす上で、看過しがたいものともなる。神田龍身氏は、現存『とりかへばや』の作者について、現存本全てが定家筆本を祖とする『更級日記』を典拠としたと思われる場面がある点、さらに、定家周辺の人の作と想定される『無名草子』に取り上げられている点から、「定家周辺の誰か」と推測する¹⁸⁾。本稿において確認した上記の定家周辺和歌との連動性は、作者を定家に近い人物とする神田氏の説の傍証ともなる。「袖の中」の「魂」の表現に対する認識の近さは、影響の先後関係はさておき、同様の言語感覚を持ち合わせていたものと見なし得る。また一方で、同時に認められたズレからは、独自の世界を切り開こうという文学的営為の一端を見ることができよう。そして、このような定家周辺の和歌作品との連動性、および物語の文脈の独自性は、現存『とりかへばや』を生んだ文化圏と、そこにおける文学的営為の様相をひも解いていく上で、極めて示唆的なものとなる。

注

(1) 本稿における引用本文には、『とりかへばや』は『新編日本古

典文学全集』（石壁敬子 小学館 二〇〇二年）を使用した。その他、『竹取物語』は、『新編日本古典文学全集』（片桐洋一 小学館 一九九四年）、『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館 一九九四—一九九八年）、『浜松中納言物語』は、『新編日本古典文学全集』（池田利夫 小学館 二〇〇一年）を、さらに、『有明の別れ』『吾の衣』『恋路ゆかしき大将』『我が身にたどる姫君』は、『鎌倉時代物語集成』（笠間書院 一九八八—二〇〇一年）を用い、ルビに関しては省略した。和歌に関しては、『新編国歌大観』によった。傍線等は稿者による。

(2) 人物の呼称に関しては、男装の女君を女君、宮の宰相は宰相中将で統一する。

(3) 小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店 一九八九年

(4) 『古今集』九九二番歌引用は、次の歌の詞書に登場する。あくまで友人同士の戯れとして利用されており、『源氏物語』以降の切迫性を持った文脈とは一線を画している。

齋宮の女別当、よそにあひてなにともいはず、又の
日袖のなかにやといひたる返事に、べたうのきみ
ぬししらで空にうきたる玉をだに結びとどむる物とこそ
きけ
（小馬命婦集・四八）

(5) 恋の文脈に用いられたものとしては、『和泉式部集』の次の例がある。

ゆくみちより、とどまるたましひをかたみにはせよ

といひたるに

わが玉はたびの空にもまどひなんとむべきそでの中は
くちにき (六一八)

また、『大斎院前の御集』においても、恋と関連させたものとして左記の歌があるが、あくまで遊離魂についての一般論として『古今集』九九二番歌を連想的に引用しており、自らの愛執を込めた『源氏物語』以降の趣向とは異なる。

十五日、月といみじうすみてあかし、進のいとど
しきそでにうつりてたまのやうにみゆれば、宰相

あかずといふたまこそそでにかよふなれうはのそらなる
月もいりけり (二二〇)

人こふるそでにもるべきあふ事をなみだのたまのかず
いれてむ (二二二)

(6) その他、『源氏物語』における『古今集』九九二番歌引用を指摘される表現として「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を」(『末摘花』④二六五頁)があるが、「袖の中」「魂」の語を用いるものではない。

(7) 『新日本古典文学大系』(柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎 岩波書店 一九九五年)は、参考歌とするにとどめる。

(8) 高田祐彦「柏木の離魂と和歌」(『日本文学』四六一—一九九七年二月)／「身のはての想像力——柏木の魂と死——」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会 二〇〇三年)

(9) 高田氏(8)。

(10) なお、『狭衣物語』には「袖の中によ」(巻二①二五八頁)(『新編日本古典文学全集』小町谷照彦・後藤祥子 小学館 一九九九年)という表現が、我が子若宮に対する、狭衣の執心を表すものとして登場する。これは、『源氏』から『浜松』へと引き継がれていった、男女の恋における引用とは異なる『古今集』九九二番歌利用の形を持つが、『源氏』における男の愛執の文脈を重ねてみると、若宮への執着は、その産みの母、女二宮への想念を背後に含ませた表現とも読み取れようか。

(11) 『校注とりかへばや物語』(鈴木弘道 笠間書院 一九七八年)、『中世王朝物語全集』(友久武文・西本寮子 笠間書院 一九九八年)、『新編日本古典文学全集』(石埜敬子 小学館 二〇〇二年)。

(12) 『とりかへばや』の引歌表現には、先行作品からの踏襲とはいえない独自の用法が認められる例がある。横溝博氏は、「末の松山」の表現が、『とりかへばや』では、先行作品に比して「諸謔味を帯びたもの」に「変化」している点を指摘する(『いはでしのぶ』の「末の松山」引用をめぐる試論——表現史における位相と諧謔性の胚胎について——『国文学研究』一四三—二〇〇四年六月)。また、拙稿『とりかへばや』の引歌表現に見られる諧謔性——宰相中将における変奏をめぐって——(『国語と国文学』八九—一〇二〇二年一〇月)、『とりかへばや』の宰相中将の恋——過剰なことばの〈文〉の空間——(『狭衣物語 文の空間』翰林書房 二〇一四年)

は、宰相中将の恋を彩る数々の引歌表現に見られる、文脈のズレによる「諧謔性」、「過剰性」を問題とし、論じたものである。

(13) 『古今集』九九二番歌を經由せず、『法華経』を直接踏まえた「衣の珠」の例については、今回は省いた。

(14) 渡邊裕美子「新古今時代の「宇治の橋姫」詠について」(『和歌文学研究』六七 一九九四年一月)／「新古今時代の「宇治の橋姫」詠」(『新古今時代の表現方法』笠間書院 二〇一〇年)

(15) 『訳注藤原定家全歌集』(久保田淳 河出書房新社 一九八五年)は参考歌にするにとどめる。

(16) 浅岡雅子・神谷敏成「藤原定家『皇后宮大輔百首』注釈(下)」(『北見大学論集』一三 一九八五年三月)は、「時のまの」歌を「後朝恋」とする。だが、「かよふ心」という表現は、雲みにもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

(古今集・卷八・離別・三七八・深養／深養父集・二〇) 遥なる程にもかよふ心かなさりとて人のしらぬものゆゑ

(拾遺集・卷十四・恋四・九〇八・伊勢)

といった例からわかるように、離れた地から思いを馳せる意であり、他の「入りにし」「とどめし」「とどめおきし」と同質には出来まい。なお、『大齋院前の御集』にも、(5)の例において「かよふなれ」という表現が見られる。ただし、この場合は前述の通り、あくまでも人から伝え聞いた、遊離魂に

ついでに一般論を表わしたものであり、「情熱的な恋心」の詠出を企図した定家歌の詠みぶりとは異なる。拙稿(12)。

(17) 神田龍身「とりかへばや物語」(『物語文学 研究資料日本古典文学』) 明治書院 一九八三年)

(かたやま ふゆき・苫小牧工業高等専門学校准教授)